カたりばた 渡畑遺跡

(日置郡金峰町宮崎字渡畑)

位置と環境

遺跡は、万之瀬川の右岸、万之瀬橋の西に広がる。 北は持躰松遺跡に隣接し、東隣の芝原遺跡などと共 に本来一連の遺跡であったと考えられる。標高約4 ~5mの自然堤防上に位置し、万之瀬川の流水作用 によって堆積した砂質土壌の上に展開した遺跡であ る。県内では調査例が少ない低地遺跡のひとつであ る。

調査の経緯

調査は、平成8年(1996)に中小河川改修事業(万之瀬川)の計画に伴い、金峰町教育委員会が確認調査を実施した。平成12年には、県教育委員会が本調査を行った。調査対象面積は、約13,000㎡である。

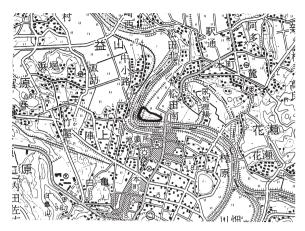
遺構と遺物

平成12年度の本調査では、縄文時代後期・晩期、 古墳時代、古代、中世、近世の遺構や遺物が数多く 検出され、複合遺跡であることが判明した。

古代の遺構は、竪穴住居跡が1軒検出され、全面にわたり非常にしっかりした張り床を有する。また、遺跡を南北に走る古道跡も検出され、途中から東側の方に枝分かれをしている。現在の国道270号線にほぼ平行に走っていた。遺物は、土師器・須恵器・刻書土器(「門」など)(第2図8・9・12・13)・土錘・紡錘車などが出土した。

中世の遺構は、畠跡が約4,000㎡にわたって洪水の砂層の下から検出された(写真1)。この下には未調査であるがまだ数枚の畠跡が広がっているようである。洪水にも負けずに同じ場所で何度も耕作を続けていたことがわかった。ほかに3間×3間の総柱の掘立柱建物跡も1棟検出された。各柱穴には挙大の礫が詰め込んであり、相当頑丈な建物であったことが推測される。また溝にはまって、伏せられた状態で青磁の集積(上から同安窯の青磁碗2枚・青白磁碗3枚・青磁皿1枚)も発見された(第2図1~6,写真2)。ほかには方形竪穴建物跡が2基,溝状遺構などを検出した。

遺物は、土師器 (第2図15・16)・青磁 (第2図



第1図 渡畑遺跡の位置

7)・白磁・須恵器(第2図14)・常滑焼・滑石製石鍋・布目瓦(第2図17)・緑釉陶器・カムィヤキ・古銭(第2図18~20)・墨書土器(「有」)(第2図11)・湖州鏡(第2図10)などが出土した。

近世に入ると、この遺跡は墓城に変わっていったことが知られ、隅丸方形の木棺墓が5基、円形の土壙墓1基を検出した。いずれも人骨が残存し、埋葬遺物としては肥前陶磁、古銭(寛永通宝)、数珠玉なども出土した。

特徴

本遺跡で特筆すべきものは、伏せられた状態で見つかった青磁6枚の集積遺構、3間×3間の掘立柱建物跡、ピット内から出土した布目瓦、緑釉陶器などである。現在の国道が近世の街道にほぼ相当したことから、当遺跡付近が中世にも交通の要衝であったことが推測され、この場所に何等かの特殊な施設があった可能性がある。

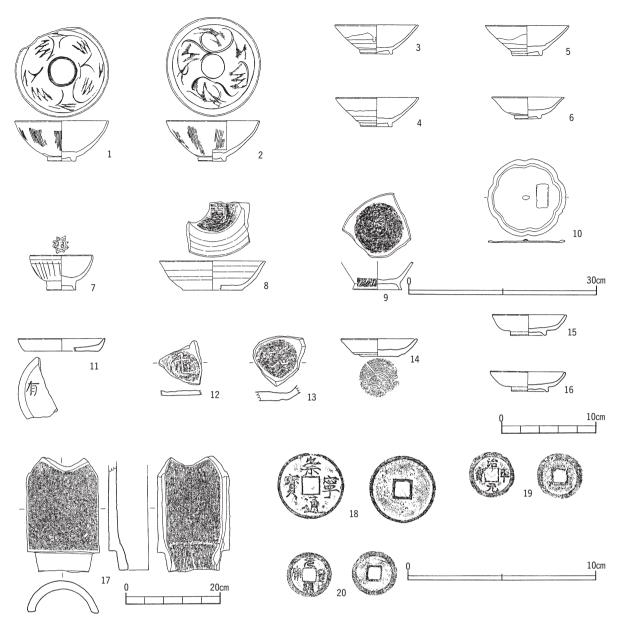
また、中世においてこれだけ重要な位置を占めていた本遺跡が、近世になると墓域化してしまう。中世から近世にかけて、河川敷に対する人々の認識の仕方が変化しているのである。人々の河川との関わりの変遷を明らかにする上で重要な遺跡である。

資料の所在

出土遺物は,鹿児島県立埋蔵文化財センターに保 管されている。

参考文献

中村和美・栗林文夫「持躰松遺跡 (2 次調査以降) 芝原遺跡・渡畑遺跡について」『古代文化55-2』 2003 (栗林文夫)



第2図 出土遺物





写真 2 青磁集積